

# 野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## スイカズラ *Lonicera japonica* Thunberg (スイカズラ科 Caprifoliaceae)

梅雨の晴れ間、山歩きをしていると何処からともなく、あまい香りが漂い、あたりを見渡すと黄色と白色の花をいっぱいつけた蔓性の植物を見かけることがあります。これがスイカズラです。本植物は日本、朝鮮半島、中国、台湾に分布し、道端や林縁など、やや湿り気のある場所によく生育する常緑の蔓性木本です。5～7月頃、花は2個並んで咲き、芳香がします。花は独特の形をしており、筒状の5枚の花びらのうち4枚は合生して上側に反り返り、1枚は下側に曲がり込んでいます。見方によっては手のひらのようで親指以外の4本がくっついて上に反らし、親指を下に広げたようにも見えます。花は、はじめ白色ですが徐々に黄色くなり、一つの枝に白色と黄色の花を同時に付けることから、金銀花（キンギンカ）とよばれます。「スイカズラ」の名は「吸い葛」の意で、古くは花を口にくわえて甘い蜜を吸うことが行なわれたことにちなみ、甘いものの乏しかった頃は、砂糖の代わりとして用いられていたようです。スイカズラ類の英名 honeysuckle も花の蜜を吸うことから付けられた名称で、洋の東西を問わずスイカズラやその近



写真1 スイカズラ (遠景)



写真2 スイカズラ (咲き始めの白色の花)



写真3 スイカズラ (白色と黄色の混ざった花)

縁の植物の花を口にくわえて蜜を吸うことが行われていたと思われます。本植物の蔓は右巻き（上から見て）で周囲の木に絡みついて良く伸び、若枝は毛で覆われていますが、後に毛は無くなります。葉は楕円形で対生し、大きさは3～7cm程度、葉は全縁、冬でも堪え忍んで葉を付けているという意味で忍冬（ニンドウ）ともよばれます。果実は球形で秋になると黒く熟します。欧米では観賞用に栽培されていますが、野生化して畑地の雑木になってしまっているそうです。本植物は薬用としても有用で、花を乾燥したものはキンギンカ（金銀花）、葉及び茎を乾燥したものはニンドウ（忍冬, *Lonicerae Folium Cum Caulis*) または忍冬藤（ニンドウトウ）といいます。キンギンカやニンドウは、ぎんぎょうさん ちづ そういっぽう銀翹散、治頭瘡一方などの漢方処方に解熱、解毒剤として、化膿性疾患、神経痛、リウマチの疼痛などに利用され、ニンドウは第17改正日本薬局方にも収載されています。生の花や蕾は香りが良いので焼酎に浸し、薬用酒（忍冬酒）にもされます。この忍冬酒は利尿作用があり、膀胱炎、腎臓病や皮膚病、強壮にも良いとされています。成分としては、フェノール化合物の chlorogenic acid, イリドイド配糖体の loganin, フラボノイドの luteolin, lonicerin (luteolin-7-rhamnoglucoside) やタンニン、サポニンなどが報告され、キンギンカ、ニンドウは両者とも浴湯料として、腰痛や痔の痛み、あせもやただれに用いられ、肌をきれいにし美容にも良いそうです。



写真4 スイカズラ (満開の黄色い花)

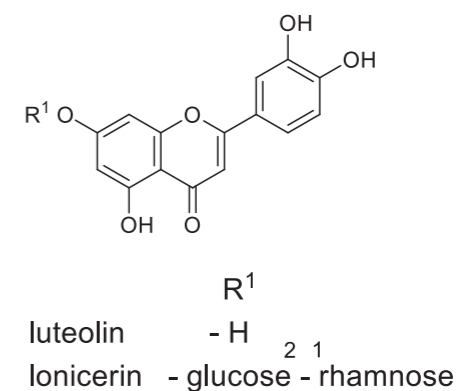
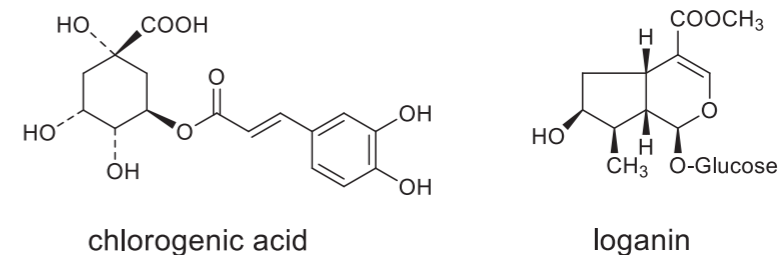


図1 成分の構造式